

## 多聞寺の念珠線り

### 486個の祈りを未来につないで

JR新市駅前の交差点から、県道新市七曲西城線を北上し、6kmほど進むと金丸の集落が見えてきます。里山のふもとに棚田の風景が広がる地域です。集落西側の山際には多聞寺があり、高い石垣と白壁の塀、入母屋造りの屋根がひととき目をひきます。

この地域は宝暦3（1753）年の百姓一揆による打ち壊しに始まり、宝



念珠線りの様子

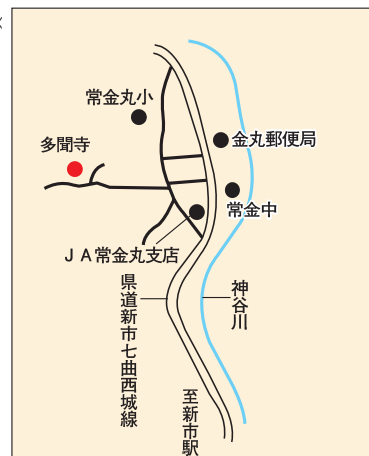
暦4・5年に冷害と虫害、宝暦9年に不作と災害が続きました。このような状況に農民は疲れ果ててしまい、生き続けるためには、神仏に祈るしかありませんでした。

そこで、村の組頭を世話役として、「朴」の木で数珠を作り、各自の名前を彫り込んで、これを集めて大念珠を作りました。念珠の重さは60kg、輪にした直径は8mあります。念珠の玉は、全部で486個あり、直径12cmの大玉が2個と、直径6cmの小玉が484個です。

この大念珠を使って行われる「念珠



念珠線りが行われる多聞寺



線り」には、暮らしの平安と豊作を祈る里人の想いがこもっています。江戸時代に、地域の人々によって作られ、今でもこの地域の大切な年中行事として引き継がれている念珠線りは、1月3日の午前10時から行われます。

（2005年1月号に掲載）



## 藤尾の文化財②

### 川井谷から旧藤尾小学校へ

県道新市七曲なまがかり西城線を金丸かねまるから、神谷川沿いに川井谷かわいだにの溪谷を縫うように北上すると、右側に魚切うろきりの滝が現れます。高さは5m50cmで、川を遡さかのぼる魚がこの滝をのぼれず、上流に進めないことからこの名が付いたといわれています。

バス停のある板橋いたばしの分かれ道を右に折れ、坂道を行くとやがて「堂前どうまえ」に出ます。分岐点には合祀社ごうしや地神の石碑、正面をわずかに登った場所に大山神社おやまじんじゃ（大山堂）があります。



旧藤尾小学校

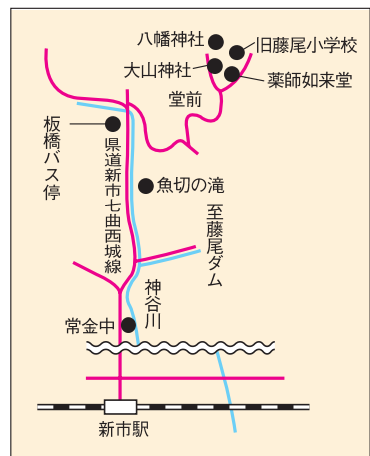
右の道の入り口付近には薬師如来堂が、坂を登ると旧藤尾小学校があります。1891（明治24）年に藤尾尋常小学校として開校しましたが、現在は廃校となった校舎と、校庭のよみの木がかつての面影を伝えていきます。

堂前の分岐点まで戻り、左の道を行くと整備された八幡神社参詣道が尾根を登るように延びています。八幡神社は標高約500mの地点にあり、木々の間から、神石高原町との境の山々が見渡せます。

1509（永正6）年に父木野村ちちきののから藤尾村を分村した際、村内17社のうち父木野村が10社、藤尾村が7社と



堂前



なったため、これを残念に思った藤尾村の人々が建てたといわれています。江戸時代以前の分村を伝えるとともに、村が分かれてなお、伝承を残す地域の営みがあったことがうかがえます。

なお、板橋から堂前の道は、幅も狭く通行には十分に注意してください。

（2005年4月号に掲載）

## 新市立石通りの道標 地域の歩みを語る

神谷川橋西詰めから、40mほど西に行くと、立石通り入り口にひっそりとたたずんでいる「道標」があります。高さ1.19m、幅18cm×28.5cmの花崗岩を方柱に整形し、頭部をゆるやかな円形に造っています。

石の東の面には「右一宮へ八丁」、南の面には「左石州道」、北の面には「左上方道」と刻んであります。福山方面から来た人が右に行くと、一宮まで八丁(872m)で、左すなわちそのまま進むと、石見(現在の鳥根県西部、特に石見銀山)に続く道であることを示しています。また、一宮方面から来



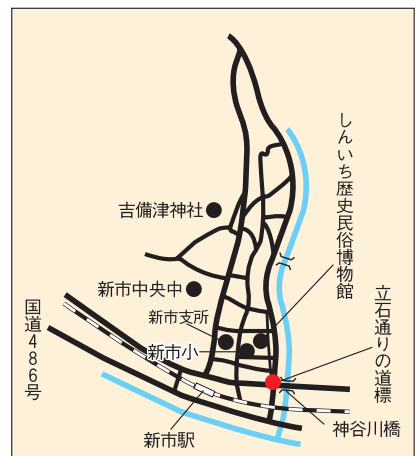
一宮への道標

た人が左に行くと、「上方」(京都の方角)に続く道であることを記しています。さらに、西の面には「新市村中世話人宮内住□□」と記され、この道標を建てたにあたり世話をした人が宮内の住人であることがわかりますが、名前は残念ながら読めません。

この道標に隣接して1910(明治43)年に建てられた、高さ4.75m、幅48cm四方の吉備津神社参道石柱(注連柱)が一對あり、石州道に面したこの地が、福山方面からの一宮参道の基点となっていたことがうかがえます。このように、道標は、地域の歩んできた歴史を数多く語りながら、ひっそり



立石通りと入り口に立つ道標



りとたたずんでいることがわかります。なお、中世には、金丸の山形地区から神石・比婆西城を経由して日本海に抜ける「西城往来」の基点としても、重要な位置を占めていました。

(2005年5月号に掲載)

## 吉備津神社の石造物 さまざまな時代を映し出して

JR福塩線新市駅から北に2km余り、車で5分ほど走ると右手に太鼓橋の架かる池が見えてきます。

吉備津神社前庭の一部であったこの池を御池といいます。池の周りは道路拡張のため埋め立てられ、すっかり景観が変わってしまいました。しかし太鼓橋の周辺は架橋当時の景観を保っています。

吉備津神社の表参道は、神谷川橋西詰めを川沿いに北上し、綱引公碑のと



太鼓橋

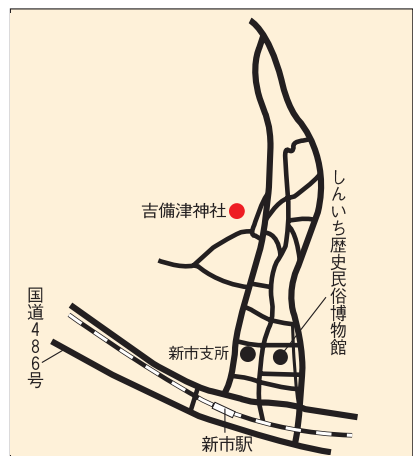
ころで左折して御池に向かっていきます。池には、かつては木造の平橋が架かっていましたが、老朽化したので、明治33(1900)年に、地域の寄付によって石造の太鼓橋が造られました。

橋を渡って西に向かうと、市重要文化財で慶安元(1648)年銘の大きな鳥居があります。高さ5m83cm、笠木の長さ7m55cm、花崗岩製の明神鳥居としては県内最大規模です。また、境内の内参道に並ぶ燈籠の笠や塔身の勾配と反りは、文政(1818~1830年)のころの特徴をよく表しています。

寒桜の咲く参道脇には、正徳年号(1711~1716年)の記された燈籠が並び、本殿前にも「水野入道勝成宗休安置」と記された、慶安2(1649)



六角燈籠



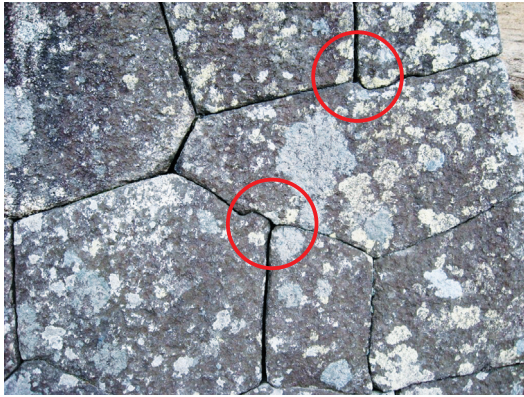
年銘の高さ約3mの六角燈籠があります。安定感のある基礎、重厚な感じを与える葺手など、文化財にふさわしい姿です。

また、楔形や鉤型に細工して崩れるのを防いだ燈籠基壇の石積みや、33段の石段、明和8(1771)年銘の亀が池脇の燈籠など各種の石造物があります。ただ、本殿南側の燈籠は、神仏分離の際の被害に遭うなど、多くの燈籠は安穩で豊かな時代の反映ばかりとは限りません。

(2005年9月号に掲載)

# 石の匠 遊び心にかくした技

福塩線新市駅で下車し、金丸方面に進むこと2km、左手に吉備津神社参道が見えてきます。参道に入ると文政元(1818)年銘の灯籠が5対10基、優美な姿で整然と並んでいます。宝珠から基壇までの部材すべての曲線が、互いに他の部材の美しさを引き出すように設計されています。



横滑りを防ぐ石組み(写真1)

大石段近くの灯籠の基礎石垣は、表

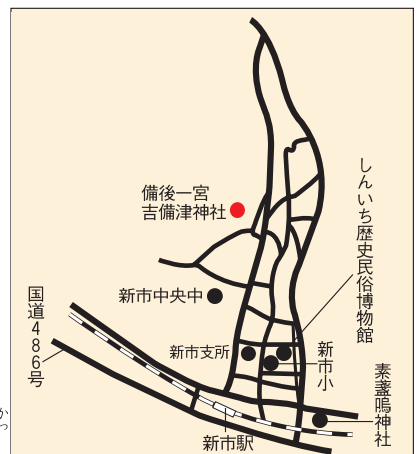
面や石と石が接する面を丁寧に削った検地積みという方法で積まれた石垣です。よく見ると石にくぼみを付けたリ鍵形を作って横ずれを防いだりしています(写真1)。

石段を登って右手、社務所裏の駐車場の北端。かつては本殿裏手から延びる舌状の小山があり、その中腹に石造の塔がありました。その塔が駐車場北端に移築されています。基壇銘文は「奉寄進三重石塔：元龜3(1572)年」と読めます(写真2)。

本殿から一段下がって拝殿がありません。拝殿の横手の石垣には、逆「人」型を造ったり、扇やひょうたんが組み込まれたりしています。石垣の組み方



三重の石塔(写真2)



にたいそんな自信と遊び心のある闊達な人の作品と見受けられます。

ほかにも日月や伝承を組み込んだ石垣、本殿前の石敷縁、亀が池石段縁などに天正(1573~1592)年号を見ることが出来ます。境内はさながら、中世から近現代まで数世紀にわたる石垣と石造物の展示会場です。

2月3日、節分の夜は世評に高い放談会があります。見て、聞いて楽しい1日にしませんか。

(2006年2月号に掲載)

## 道上の亀山遺跡

### 三重の濠で囲まれた遺跡

JR福塩線道上駅から北へ200mほど行くと道上公民館があり、その後ろに岡山神社が鎮座しています。

神社裏の丘陵は、亀の姿に見えることから亀山と呼ばれ、ここに亀山遺跡があります。

亀山遺跡は、戦前から弥生土器や石の鍬が発見され、かつては石器製造所と考えられていました。しかし戦後の発掘調査の結果、芦田川流域で最初に米作りを行った遺跡の一つであると



亀山遺跡近景

分かりました。

この遺跡の特徴は、三重の濠の存在です。弥生時代前期の紀元前3世紀に一番内側に幅約2m、深さ1.5mでV字形の濠が掘られます。これが埋まると、その外側に二番目が掘削され、これも埋まると、この南半分を利用して丘全体を巡る三番目が掘られました。集落を濠で囲むのは、農耕技術とともに日本に持ち込まれた文化です。

ところで、二番目の濠の外側には土塁がありました。掘った土と周辺の土を交互にたたきしめ、堅固に造られていました。丘陵東側は緩やかな地形のため、必要だったと思われます。

亀山遺跡の南北の高まりには古墳が



土塁断面



築かれています。北側の亀山第1号古墳は5世紀前半の直径28m、高さ2mの円墳で、すべて盛土です。頂上部を掘りくぼめ木棺を据え粘土で覆っていました。木棺の内外部には短甲や鉄製の鍬・刀・剣・鉾などの武器、首飾りなどの装飾品、鉄製の斧などの道具類が収められ、これら副葬品の数は県内で最も多い量でした。

また、平安時代の日本製の鏡が、丘の頂上の中央から、木箱に収められ布に包まれて見つかっています。

亀山遺跡は1941年に県史跡に指定されました。

(2006年3月号に掲載)

# 堂々川の砂留

## 国内最大級の6番砂留

神辺周辺の山々は風化した花崗岩<sup>こうざん</sup>であるため、川は、豪雨があれば土砂を下流にもたらし、平常は土地より川床が高い水枯れの天井川となっています。私たちの祖先は、自然災害から身を守るため数々の努力をしてみました。

江戸時代、山の樹木は根までも燃料・灯火材として伐採され、植林もされず荒れる一方でした。1673年には堂々川上流の大原池が決壊し、63人



堂々川6番砂留

の犠牲者が出て、備後国分寺や田畑が土砂で埋まりました。そのころから福山藩は砂防工事を計画しますが、18世紀以降本格化し、明治以降も行われています。砂防ダムは砂留と呼ばれ、福山藩内には50の砂留が残り、神辺には45の砂留が確認されています。

その中で最大規模を誇るのが堂々川6番砂留です。1773年以前には基層部が作られ、1835年に現在の形になり、1976年に最後の改築をしています。堤高13.3m、堤長55.8mあり、前面は大型の割石を階段状に積み、台形の断面をしています。また、



堂々公園



横から見ると緩やかなアーチを描き、外力を端部に分散させる工夫をしています。砂留の上流側にたまった水は、石垣の間から絶えず流れ出て、砂は一定量になると除去したと言い伝えられています。多くの砂留の構築と定期的な砂ざらえの努力、そして植林が水害を防ぐことになりました。

この砂留の後背地は堂々公園と呼ばれ、四季折々の植物が植えられ各種のイベントが開催されています。

2008年8月3日、この6番砂留を含む8基の砂留は、国の登録有形文化財に登録されました。

(2006年5月号に掲載)



## 葛原しげる生家

### 「夕日」や多くの校歌つくる

1886年6月25日、「ぎんぎんぎらぎら夕日が沈む」の歌詞で有名な童謡作家で、名誉市民でもある葛原しげるが、この家に生まれました。

葛原しげるは福山中学校を卒業し、東京高等師範学校で英語を学びました。卒業後、小学校教諭をしながら童謡の創作に励み、1921年に音楽雑誌「白鳩」に「夕日」を発表。1945年、東京空襲が激しくなると神辺町八尋に疎開し、戦後は、戸手に創立された至



葛原しげる生家

誠女子高等学校の初代校長を務めました。1960年再度上京しましたが、翌年12月7日に亡くなりました。全国約400校の校歌を作ったことでも有名です。

しげるの祖父に琴の名手、葛原勾当こうどう（1812～81）がいます。3歳の時に失明し、9歳から筆を習い始めました。1822年京都の松野勾当の内弟子になり、1826年から弟子に稽古をつけるようになりました。勾当が山陽地方に箏曲を広めたと言っても過言ではないでしょう。

勾当は15歳から代筆で、26歳からは自ら考案した本活字を使い、71歳で亡くなるまでの46年間日記を記し続けま



葛原しげる先生の童謡碑

した。これらの日記や印刷用具は県重要文化財に指定されています。

この家は勾当自ら設計したといわれ、1846年の建築で、正門の右には1930年建立の「琴師葛原勾当碑」、左には1964年建立の「葛原しげる先生童謡碑」があります。

今月22日には、神辺文化会館で「葛原しげる生誕120年記念コンサート」かがやけ夕日 ニコピン先生の心伝えて」が開催されます。

（2006年7月号に掲載）



## 菅茶山の廉塾

### 私塾の果たした役割

菅茶山（1748～1827年）は  
神辺東本陣に生まれました。

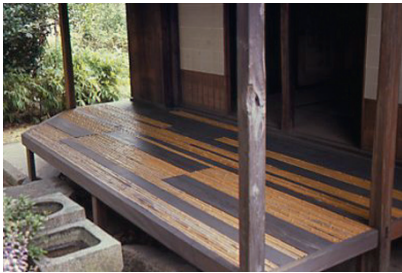
茶山は6度にわたって京都で朱子学を学び、1781年ごろに「黄葉夕陽村舎」という塾を開きました。当時の神辺は「この外悪風俗」な町になっていたと「郷塾取立に関する書簡」で述べており、世の乱れを教育によって是正することが目的でした。塾生は神辺や福山を中心に四国や九州、奥羽



廉塾と茶山旧宅

にまで及びます。在塾期間は2～3年で、塾への出入りはかなり自由でした。塾生のほとんどは寄宿舎生活で、飯料・書物料は支払っても、授業料の徴収はありませんでした。塾生の教育条件を等しくし個性や学力を伸ばすことに重点を置き、四書五経による講釈中心の授業を行いました。塾が山陽道の宿場にあることから、江戸・京都・大坂や長崎を往来する当代一流の文人の多くが立ち寄り、文化・学問の交流がありました。

また、天明百姓一揆（1786・87年）の経験と朱子学の理念から、出口村（府中市）や千田村（千田町）・市村（蔵王町）の有力者を指導して社会を行わせました。春、年貢を納められない人



濡れ縁と手水鉢



に低金利で米を貸し、夏、麦で返却させたのです。

菅茶山の漢詩は、心に映るものを自然なまま詠み、当時の詩風を一変させた。「当世随一の詩人」と評されました。

1796年、塾の永続化のため福山藩校・弘道館の郷塾（分校）とする願を藩に提出し、受理されました。これ以降、塾は「廉塾」とか「神辺学問所」と呼ばれました。現在、竹と板を組み合わせた濡れ縁をもち3室20畳からなる講堂や塾生が寄宿した寮舎・書庫などの塾施設と、隣接する居宅が昔の面影をよく残しています。1953年、国の特別史跡に指定されました。

（2006年9月号に掲載）



## 箱田良助顕彰碑

### 伊能忠敬の弟子

「箱田良助生誕之地——大日本沿海輿地全図完成に尽力した 榎本武揚の父——」とあるこの顕彰碑は、神辺町箱田の旧細川邸の前に立っています。

1790年、箱田村庄屋細川家の次男に生まれた良助は、1807年に兄と一緒に伊能忠敬（1745～1818）に入門しました。

1809年からの忠敬の第7次測量に参加することになり、誓約書を父と



箱田良助顕彰碑

忠敬の弟子でもある谷東平（たごとうへい）（1774～1824 井原市大江町出身）と連名で提出し、忠敬の規則を守らず役に立たなければその場に捨て置いてほしいと記しています。この測量で忠敬は神辺東本陣に宿泊し、菅茶山が訪問しています。1811年、忠敬は九州からの帰途箱田村に宿泊し、「庄屋園右衛門、良助親ノ家」と日記に記し、郷里佐原（千葉県）への土産として畳表の購入を園右衛門に依頼しています。第8次測量（1812年）、第9次測量（1815年）で良助は中心的に動きまわりました。1816年、内弟子筆頭となった良助は第10次測量を任せられ



旧細川邸

ました。この年から「大日本沿海輿地全図」の作成に取り掛かり、1821年幕府に提出されました。

1822年、箱田良助は御徒士榎本株を買入籍し、5人扶持55俵となり、翌年幕府天文方に出仕します。1844年御勘定、旗本になりました。1860年8月に没します。

同年の桜田門外の変を伝えた親戚への書簡で、「倅勇之助は講武所へ出役…次男釜次郎は御軍艦操練教授方出役」と記しています。この次男が函館の五稜郭にたてこもり、のちに明治政府の大臣を歴任した榎本武揚（1836～1908）にあたります。

（2007年1月号に掲載）



## 大坊古墳

### 巨石で造られた終末期古墳

福塩線が走る神辺町から府中市にかけての平野やそれに接する丘陵には、数多くの遺跡が残っています。その中でも神辺町には、中条地区から御野地区にかけて横穴式石室をもつ古墳が多く分布しています。

大坊古墳は中条の丘陵の東斜面に築かれています。発掘調査は行われていないため、直径約14m、高さ約5mの南北方向にやや長い円墳とも、方墳ともいわれ確定していません。



石室内部



石室入口

大坊古墳の横穴式石室の入口は南東に向けて開いており、石室の長さが約11m、幅・高さとも約2mと大規模なものです。昔から入口が開いていたため、残念ながら石室内の副葬品は不明です。

この石室の特徴は、表面を磨いたような花崗岩を石材として使用していること、遺体を納める玄室と玄室までの通路である羨道がほぼ同じ規模で設計されていることがあげられます。また、玄室が床面の中央に置かれた2個の石によって前後の2室に分けられており、入口には2本の石柱が立てられています。

このような石室の造り方は、福山北



産業団地内の粟塚古墳の丘に移設されている狼塚2号古墳や、新市町戸手の大佐山白塚古墳にみられ、特に狼塚2号古墳は大坊古墳の約2分の1の縮尺で設計されています。古墳造りにあたり、同じ技術者集団の存在がうかがわれます。

これらの特徴から、大坊古墳は古墳時代も終わりに近い7世紀前半に、この地方の有力な豪族の家族墓として築かれたものと考えられます。

1983年に県史跡に指定されました。

(2007年5月号に掲載)

## 栗屋平兵衛

### 服部千間土堤をつくった恩人

服部大池の北側にある服部橋の西詰めに「栗屋平兵衛翁を頌す」と題した七言絶句の石碑があります。ここに刻まれた漢詩は、戦前駅家村長を務めた戸手実業学校・増川女学校などで教鞭を執った安村伝六（1878～1966）が作ったものです。

平兵衛は、服部本郷の、屋号を「寿利」という児玉家に生まれ、成長して同族の屋号「栗屋」へ養子に行ったので栗屋平兵衛と一般に呼ばれました。現在の浄土真宗円福寺のある場所が屋敷跡



平兵衛の墓

と伝えられています。元禄13年の検地水帳によると、彼の屋敷は、「所称田」という所にあつて、面積は三畝六歩（約96坪）という広さでした。そして、服部本郷村と雨木村の庄屋を兼ねており、本郷の「鼠谷」という場所で金・銀・銅などを採掘する鉱山経営で財を蓄えたといわれています。

当時の服部川は、長雨が続くたびに洪水となり堤が決壊し、「門前」や「市場」の田畑は流されて多くの百姓たちは困窮するありさまでした。平兵衛は百姓たちの惨状を見かねて自ら資金を投じ、服部川両岸の堤の幅を広く

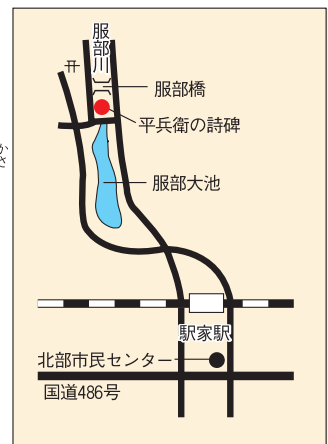


平兵衛頌徳の詩碑

し、高さを嵩上げする増強工事を行いました。この工事は服部大池の北口から、服部小学校があるあたりまでの長い距離だったため、人々は誰言うとなく、千間土堤と呼びました。

彼は、この郷土の恩人であるにも関わらず、現在ではあまり知られていません。なぜでしょうか。それは、彼が「享保の一揆」の責任を問われて、福山藩から追手を差し向けられ、すべての財産も没収のうえ領外追放という罰所処分となったため、歴史に埋もれてしまったからなのです。平兵衛こそ真の義人といえましょう。

（2007年6月号に掲載）



# 神辺城跡

## 中世の守護城

中世備後国の守護城として黄葉山こうようざんに築かれた神辺城は、現在吉野山公園として整備され、四季を通して多くの人々に親しまれています。

城跡は神辺平野を一望できる要所があり、本丸を中心として西や北に延びる尾根上には23の郭くわが確認され、堀切や井戸跡も残っています。1976(昭和51)年に行われた公園整備に伴



城跡遠景

う発掘調査では、礎石建物跡・溝・石垣などが検出され、多量の軒丸のきまる・軒平のきひらなどの瓦類・素焼土器・陶磁器などが出土しました。

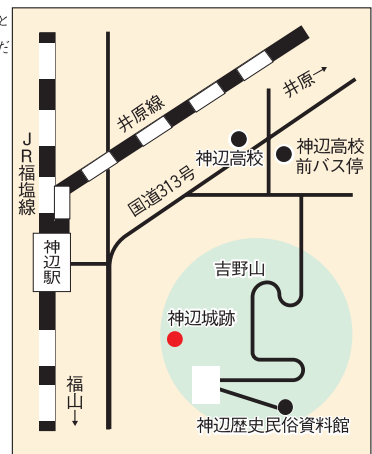
神辺城は、南北朝内乱で後醍醐天皇方として功績のあった朝山景連が備後国守護に任命され、1335(建武2)年に築城したと伝えられ、その後、細川・渋川・山名の各氏が備後国守護として在城します。

戦国時代になると大内・尼子両氏によって中国地方を巡る覇権争いが起こり、1538(天文7)年に山手銀山城主・杉原理興たかたけ(大内氏方)が神辺城(尼子氏方)を攻撃し、山名氏を名乗って城主となります。

大内氏が尼子氏の本拠であった月山がつさん



豎堀跡



と富田城の攻撃に失敗すると、理興は尼子氏方に付いたため、天文13年から同18年にかけて毛利・小早川氏(大内氏方)によって攻撃を受け、城の北麓の城下町で攻防が繰り返されます(神辺城合戦)。その後、銀山城主・杉原盛重や毛利氏の直轄支配になりました。

江戸時代になると、広島藩主として福島正則が芸備を治め、家老であった福島正澄が城代を勤めますが、1622(元和8)年の福山城築城により廃城となりました。

(2007年11月号に掲載)

## 神辺城下町遺跡 戦国時代の城下町

神辺城を中心とした戦闘が激しくなる戦国時代になると、ふもとにあった杉原氏の居館周辺には家臣団が屋敷を構えて常駐するようになります。

最初に神辺城合戦のあった1544（天文13）年に毛利元就が部下の功績を褒めるために出した感謝状には「固屋口の合戦」という言葉が出てきます。



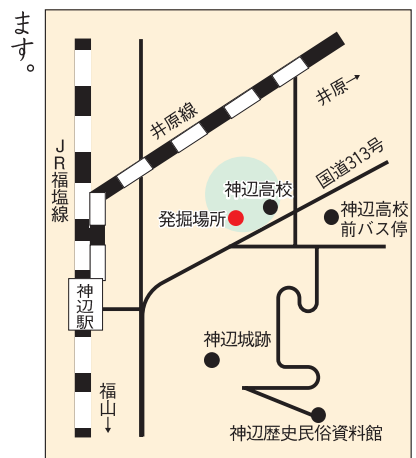
発掘時の写真（現在は埋め戻されています）

現在の県立神辺高等学校周辺は地元では「こやの内」と呼ばれており、この辺りにあった武家屋敷を中心に激しい戦いが行われたのでしよう。この「こやの内」を取り囲むように、七日市・三日市・十日市という三斎市の地名が現在でも残っており、城下町の経済基盤も整っていたことがわかります。

昨年（2016）年の10月に行われた「こやの内」の発掘調査では、戦国時代から江戸時代初めにかけて掘られた幅4m・深さ1m程の堀が発見されました。堀の中からは瓦類や中国製の白磁・青磁碗などが出土しています。また、直径1.5m程の丸い穴の中からは焼けた瓦や陶磁器類が多量に出土しており、戦の火災処理のために掘られたものと考えられます。



城下町遺跡から出土した志野焼の皿



ます。

この堀は、城主居館のものと較べるとやや小規模なことから有力家臣の屋敷を取り囲んでいた堀と考えられますが、神辺城下町もこの頃から次第に戦国時代の城下町として形を整えていったことがわかります。

また、福島正則の筆頭家老であった福島正澄が神辺城代を勤めた江戸時代の初めには、この堀も掘りなおされ、城下町の整備は一層進んだようです。

これまで幻の城下町であった西国地方有数の戦国時代城下町遺跡が眠りのベールから目を覚まそうとしています。

（2007年12月号に掲載）